



No.18

ひびき

ドラム缶工業会会報

ドラム缶工業会の 1998年度の活動方針について

さる1月13日、ドラム缶工業会の新年賀詞交換会において、工業会を代表して挨拶にたった山口理事長から、ドラム缶工業会の本年の課題・活動方針の要旨が次のとおり発表されました。

.....◇.....◇.....◇.....◇.....

昨年を振り返って見ると、年初の「ナホトカ号の沈没事故」の対策を工業会を挙げて協力をしたことに対し、総理大臣表彰、運輸大臣、通産省基礎産業局長感謝状を受けることができ、工業会の社会への貢献が認められたことは特筆すべきことであった。

また、新規メーカーの稼働等があり、市場における競争が激しくなったものの、幸いなことに需要家業界の活発な生産活動に支えられ、工業会全体の年間出荷量は、トン数ベースで、前年比106.2%と増加したことは、喜ばしいことであった。

今年は、日本の経済全体が厳しさを指摘される中で、ドラム缶業界を取り巻く環境は極めて厳しいと言わざるを得ない。既にドラム・ペールの需要は冷え込んでおり、また年内には外国資本の新規メーカーの参入も予定されており、競争の激化は避けられない。会員各社が対応を誤ると、需要業界へ迷惑や混乱を及ぼす結果になることが予想される。

日本全体が21世紀に向けて大きく変わっていくだろうと考えられる中で、ドラム缶業界が発展をとげるためには、工業会の活動もさらなる活性化が必要であり、また新しい風を吹き込むことも大切なことである。

元来工業会活動の基本は、会員相互の情報交換、需要業界に対してドラム・ペール業界の動向——例えば、技術動向・営業情報・流通問題・国際問題——のPR、関連業界との交流、および会員相互の研鑽と親睦であるが、今年はこの基本に基づいた工業会活動を積極的に行いたいと考えている。

一方、この2~3年で、工業会委員会の活動メンバーの若手化が進んでいるので、従来硬直化しがちであった工業会に新しい息吹が感じられるようになってきたことは、喜ばしいことと言える。

以上の観点から、今年のドラム缶工業会は、次の四つの

点に重点を置いて、工業会の活動をすすめたい。

まず第一は、関連業界との連携を強めることである。更生缶工業会とは数年前から「ドラム缶協議会」およびその下部組織の「ドラム缶連絡会」での活動が定着しているし、需要業界とは、昨年、日本化学工業協会と懇談会を発足することが出来た。今年はこれらの懇談会の内容をさらに充実させ、お互いの業界の抱えている問題を率直に話し合い、業界同士の相互理解を深めていきたい。

第二は、ドラム缶工業会会報の「ひびき」の活用である。「ひびき」は、会員や需要家への広報の役割を果たしている。最近、ドラム・ペール業界では、国内でも、国際的にも話題が豊富である。流通や塗装・マーキングに関して大きな問題も抱えている。また、技術開発や、環境問題について多くの進歩が行われている。「ひびき」はわずか4頁、年4回の発行であり、その紙面が限られているが、その時点で最も大事な話題を有効に紹介していきたい。

第三に、共同研究の推進である。過去にも、「危険物輸送」、「流通合理化」、「ドラム板厚の強度への影響」、更生缶工業界との共同で、「クリーン・リサイクル・ロゴマークの制定」、「ドラムリサイクルの調査」などの実績があるが、今年も積極的に共同研究を推進したい。この活動は、会員会社相互の工場見学会や技術発表会と相まって、会員の相互研鑽に大いに役立つものと思われる。

第四は、国際協調活動の推進である。今年は2月15日からインドのムンバイ(ボンベイ)において第3回のA O S D (Association of Asia-Oceanic Steel Drum Manufacturers, アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会)国際会議が開催され、12か国から127名が参加することになっている。またI C D M (International Confederation of Drum Manufacturers, 国際ドラム缶製造業者連合会)の役員会が4月にフランスで、10月にアメリカで開催される予定になっている。さらに、ドラムと口金の規格化、および、危険物輸送規則の国際標準規格化についてのI S O委員会活動が推進される。特に、I C D MとA O S Dは現在日本が会長国であり、リーダーシップをとる立場であるので、国際交流の発展に寄与していきたい。

以上四項目に重点を置いて工業会の運営に務めていきたい。今年は会員各社にとって厳しい環境になると予想されるが、競争の激化を前向きにとらえて、各社がそれぞれの立場で企業基盤の強化に努められることを期待したい。このことが工業会全体の発展につながると思う。そして、今年も工業会活動に積極的に参画していただき、ご協力下さるようお願いしたい。

.....◇.....◇.....◇.....◇.....

新年賀詞交換会には、通商産業省基礎産業局 佐藤鉄鋼課長、清水鉄鋼製品班長、鈴木鉄鋼製品係も出席され、佐藤課長が祝辞を述べられた。



NEWS FILE

.....◇.....◇.....◇.....◇.....

当社は、正会員、特別会員、賛助会員のメンバーに加えて、通商産業省、歴代理事長、日本ドラム缶更生工業会代表、マスコミの方々等をお招きしましたが、出席者134名が、和気あいあいとして新年の挨拶と活発な交流が行われ、懇親を深め合いました。

第3回AO SD ムンバイ国際会議開催さる

世界12か国から127名の参加者を得て開催されたAO SD (Association of Asia-Oceanic Steel Drum Manufacturers, アジア・オセアニア鋼製ドラム製造業者協会) の第3回AO SDムンバイ(ボンベイ)会議は、2月16、17日の2日間のセッションを踏まえ、2月17日(火)の山口AO SD会長による決議及び勧告採択後、翌日2月18日(水)のBalmer Lawrie社ドラム缶工場訪問、2月19日(木)のムンバイ市内観光で全ての行事を予定通り滞りなく終了し、盛況裏に閉幕しました。

第3回ムンバイ会議の結果を下記の通りご報告いたします。

【会議の概要】

- (1)会議テーマ：アジアにおける鋼製ドラムの時代 (Era of Steel Drum in Asia)
- (2)開催期間：1998年2月15日(日)～2月19日(木)
- (3)開催場所：タージ・マハル・ホテル
(ボンベイ湾に面し、インド門の前にある、ムンバイで最も格式の高いホテル)
- (4)会議議事：
 - ①AO SD総会(開会式、来賓挨拶他)
 - ②各国の市場動向——9か国より報告。
(別途更生缶2件)
 - ③技術テーマの自由発表——7か国より発表。
 - ④AO SD総会(会議決議・勧告他)
- (5)参加者：12か国127名

【会議議事の概要】

第1セッション：市場動向

オーストラリア、日本、インド、韓国、シンガポール、フィリピン、中国、台湾、スリランカの9か国から、市場動向、競合品の動向等について報告がありました。また、インド及び日本の更生缶業界の現状についての報告もありました。

日本からの発表は、次の2件です。

- 1. 日本におけるスチール・ドラム及びペールの将来展望
日鐵ドラム㈱ 安達社長
- 2. 日本に於ける更生缶業界の現状
日本ドラム缶更生工業会 田中会長

第2セッション：技術関係

- 1. 表面処理及び塗装
インド コンサルタント S.S.アルワリア氏
- 2. ドラム缶製造工程の自動化
日本 協和容器㈱ 松本弘氏
- 3. 内面塗装の仕様及び技術
シンガポール リーム(ファーイースト)社 T.Y.J.タン氏

4. 鋼製ドラム塗装表面処理

韓国 インスン社 K.柳氏

5. ペール缶用新素材としてのアルミニウムめつき鋼板

日本 株ユニコン 田邊社長

6. 有限要素モデル及び新コンパウンドを使用したガスケット性能の最適化

オーストラリア マッケイ社 G.ウイルソン氏

7. ドラム業界の革新的動向及び環境保護要素

インド プレミアグラインダー社 D.サッカーフィ

なお、会議の前日、2月15日(日)に開催されたAO SD正副会長会議で以下の通り、合意し、会議期間中に開催されたAO SD総会で報告、承認されました。

1) AO SD副会長候補者選出

AO SD副会長候補者として、インド、B.O.Singh氏、韓国、K.柳氏、シンガポール、Chou Li氏を選出した。

2) AO SDの会則について

AO SDの会則について討議し、以下の通り合意した。

(1)会員の登録について(会則 第4条)

AO SD会員を確定するため、AO SDメンバーの登録制度を導入する。

(2)会費について(会則 第5条)

会費はこれまで同様、当分の間設定しない。即ち、JSDAが必要費用を負担する。

(3)会長と事務局について(会則 第6条)

現在の会則 第6条は次の第4回韓国会議まで、JSDAがAO SDの会長国となり、AO SDの事務局もJSDAが務めることになっているが、各国の工業会設立が遅れていること、及び会長国の経済的負担を考慮し、第4回韓国会議後、6年間、即ち2007年まで、JSDAがAO SDの会長及びAO SD事務局を担当する。

(4)各国の生産本数の報告

AO SD各団の活動を明確にするために、今後、各国の生産本数(歴年)実績を毎年、AO SD事務局に報告する。

(5)第4回AO SD会議の場所と時期

第4回AO SD会議は2001年4月、韓国の慶州(Kyung Ju)で開催する。

JSDA(日本ドラム缶工業会)は、このような国際交流を通じて世界各国の情報を集め、また世界中の同業者との交流を深めることで業界の向上と発展を目指しております。関係各位のより一層のご支援をお願い致します。



平成9年(歴年)出荷実績まとまる

— 200L缶 前年比で7%の増加 —

平成9年(1月~12月)ドラム缶・缶種別・用途別出荷本数

単位:千本

缶種	石油	化 学	塗 料	食料品	その他の	合 計	前 年 比 %
200 L 缶	2,024 (109.9)	9,327 (106.2)	792 (99.2)	144 (103.1)	413 (129.5)	12,700	107.1
ペール缶	13,283 (100.8)	10,973 (102.3)	841 (79.8)		797 (106.4)	25,894	100.7
100 L 缶	10	196	2		2	210	114.1
50 L 缶	微	301			19	320	110.3
アス缶型	15	10				25	147.1
その他容量缶	3	647	1	9		660	93.4
200 L 亜鉛鉄板缶	9	102	5	1	5	122	100
200 L ステンレス型		17				17	94.4
200 L 小計	9	119	5	1	5	139	99.3
中小型 亜鉛鉄板缶		237				237	107.7
中小型 ステンレス型		5				5	100
中小型 小計		242				242	107.6
合 計	15,344	21,815	1,641	154	1,239	40,190	102.7
構 成 比	19.4	70.5	5.7	1.0	3.4	100.0	

(注) 1. 200L缶、ペール缶の下段()は、前年比。

2. 構成比は、ドラム缶の出荷トン数の構成比。



インドでは人が多いことはつとに有名だが、車もむちゃくちゃ多いことはあまり知られていない。インドの大都会ムンバイ(ボンベイ)では、古くて傷だらけの車が芋を洗うように渦巻いている。サイドミラーなどすぐふっとんてしまうので、はじめからつけていないし、外車はミラーを折りたたんで走っている。走行車線などあらばこそ、対向車線ですら空

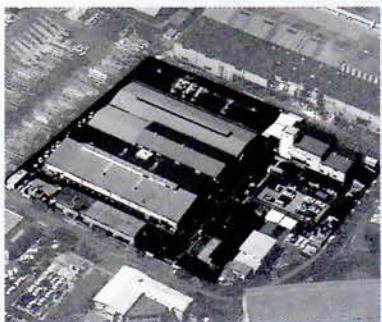
いていれば当然のようにつっこんでいく。前の車が邪魔なら警笛を鳴らすのがエチケットで(バスやトラックなどの後部には「Horn Please」と大書してある)、町中がビービーと喧騒の渦。そのおしゃいへしあいの中を、何と、人間が、牛が、ラクダが、人々と車をかき分けて歩いている。まさに壮大なる矛盾と混沌/

しかしインドという国凄いところは、こうした混沌を全てあるがままに受け入れているところにあるのではないか。わ

れさきにと突っ込む車とその間を平然と歩く人や牛、活気に満ちた町のそこそこにぼろを纏ってねころがり物乞いをする貧民。そうした全てを、「排除」の論理によって「整理」し性急に「秩序」や「美観」をもたらそななどとは決して考えず、まずあるがままを容認し、その上で全体として一歩一歩向上していくべきだ。そう考えて、悠久の大地に育まれた価値観、いや世界観の圧倒的な違いに絶句する思いであった。

(中川義幸)

MEMBER'S MESSAGE



株式会社 ユニコン

○ユニーク（あらゆる用途に適した）
○コンテナ（容器をとおして）
○サービス（社会に貢献する）
という創業の理念のもと、ペール専門メーカーとして高品質の製品を造り続けてまいりました。

お蔭さまで平成9年には創立30周年を迎えることができました。これを機に、より良い品質のペール缶とサービスを提供できるよう、社員一同決意を新たにしています。

今後とも、従前にも増したご指導、ご鞭撻をおねがい申し上げます。



エノモト工業 株式会社

昭和9年ドラム缶用口金の製造を開始して以来60有余年、日本国内はもちろん海外のお客様に品質の良いドラム缶用口金を提供させていただいている。

1995年4月にはインドネシアのジャカルタ近郊に、東南アジアを中心とした市場にドラム缶用口金を供給する拠点とした製造販売会社を設立しました。

本社工場においては、1997年1月に品質保証システムであるISO9002の認証を取得し、引き続いてインドネシアの工場も1997年7月に取得いたしました。

ドラム缶の重要部品である口金について、飽くなき品質向上と、お客様のニーズに即応出来る体制を構築しています。引き続きご愛顧下さいますようお願い申し上げます。

《賛助会員》

エノモト工業(株) 三恵マツオ工業(株) 丹南工業(株) 株大和鐵工所
三喜プレス工業(株) 株城内製作所 東邦工板(株) 株水上工作所

ドラム缶工業会

東京都中央区日本橋茅場町3-2-10

(鉄鋼会館3階)

TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969

A D K 秋田ドラム工業株式会社
秋田市土崎港北6-2-22 ☎ 0188-45-1105

 川鉄コンテイナー株式会社
大阪市北区堂島浜2-1-29 ☎ 06-344-9711

 協和容器株式会社
新潟市下木戸2-4-20 ☎ 025-274-0371

 鋼管ドラム株式会社
東京都中央区銀座8-11-11 ☎ 03-3574-0711

 斎藤ドラム缶工業株式会社
横浜市鶴見区生麦3-15-14 ☎ 045-521-3881

 山陽ドラム缶工業株式会社
岡山県倉敷市中島1230 ☎ 0864-65-3680

 新邦工業株式会社
東京都千代田区神田佐久間町4-18 ☎ 03-3861-5285

 ダイカン株式会社
大阪市此花区島屋2-11-63 ☎ 06-466-4601

 大同鉄器株式会社
尼崎市杭瀬南新町3-2-21 ☎ 06-488-2468

 株式会社東京ドラム罐製作所
東京都葛飾区東四ツ木2-23-16 ☎ 03-3695-8511

 東邦シートフレーム株式会社
東京都中央区日本橋3-12-2 ☎ 03-3274-6212

 株式会社長尾製缶所
和歌山県有田郡吉備町野田144 ☎ 0737-52-2591

 日鐵ドラム株式会社
東京都江東区亀戸1-5-7 ☎ 03-5627-2311

 株式会社前田製作所
東京都港区新橋1-5-5 ☎ 03-3573-7101

 森島金属工業株式会社
千葉県佐倉市大作2-5-5 ☎ 043-498-3551

 株式会社山本工作所
北九州市八幡東区大字枝光1950-10 ☎ 093-681-2431

 株式会社ユニコン
大阪府高石市高砂2-7 ☎ 0722-68-0515

ひびき

No.18(平成10年3月14日発行)

発行人 ドラム缶工業会
事務局長 藤野泰弘

本誌は再生紙を使用しています。